様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６２３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２３１３

研究課題名（和文）古英語期の聖人伝における女性像－Ａｅｌｆｒｉｃの言語とテクストの基礎的研究

研究課題名（英文）Images of Women in the Old English Lives of Saints -- Aelfric's Language and Texts

研究代表者
島崎　里子（Shimazaki, Satoko）

昭和女子大学・文学研究科・准教授

研究者番号：９０２７６６１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究課題では、10世紀英国を代表する散文作家であるAelfricのvirgin spouses作品群に描かれる女性像について、彼が参照した可能性のある原典および他の諸作品との比較対照研究を行い、特に語彙や作品構成の面から、その特徴を検証した。
　まず、Aelfricの既存のテクストを現写本に忠実な電子版テクストへと校訂し(H27年度)、これにラテン語原典の対応箇所を配置した電子版テクストを作成した後(H28年度)、様々なレベルでAelfric以前の諸作品との比較対照研究を行い、7世紀から10世紀初頭の英国におけるvirgin spousesの受容の系譜に関する新たな展望を得た(H29年度)。

研究成果の概要（英文）：　This research focused Aelfric's distinctive manner in which he described the women in his homilies of virgin spouses, paying a special attention both to his usage of vocabularies and narrative methods. The process in which the Anglo-Saxon society at Aelfric's time and before had been accepting a relegious model of virgin spouses was explored.
　In the research, first, the present edition of Aelfric's texts were revised into a diplomatic e-texts on the basis of the extant manuscripts. Then, the Latin sources were juxtaposed to it. Finally, the Anglo-Saxon authors' attitudes towards virgin spouses were closely examined from the various aspects through comparison of the e-texts above mentioned and other works before Aelfirc which he might consulted.

研究分野：古代・中世英文学

キーワード：古英語　女性　聖人伝　Aelfric

１．研究開始当初の背景

10 世紀初頭から 12 世紀にかけての英国では、宗教界の共通言語であるラテン語を十分に理解できない聖職者の増加に伴って、英語による聖書や聖人伝への需要が高まり、多くのラテン語文献が英訳されていた。当時を代表する宗教散文作家である Ælfric は、こうした需要に応えるべく、ラテン語聖書や聖人伝の古英語訳を次々に制作した。しかし、ラテン語原典には、そのままでは英国文化に馴染まない内容が含まれることも多く、Ælfric の英訳は、キリスト教の正統な教義の伝承を目的としながらも、同時に聴衆への影響や理解度に配慮して原典の表現や内容を大幅に改変し、逐語訳とは全く異なる彼自身の思想を反映した独自の作品であった。中でも Ælfric の描く女性像は、大胆かつ巧みな改変によって原典世界とは異なる独自の特徴を備えている。ここでの改変は、原典の語彙や表現を加除修正するレベルにとどまらず、場面設定など作品構成のレベルにおいても行われ、描かれる女性像に大きな影響を及ぼしている。このような女性像への対応は、Wulfstan など同時代の他の作家には見ることができず、注目に値するにもかかわらず、これまで殆ど指摘されてこなかった。

当時のキリスト教社会では、男女を問わず未婚者の至上性が説かれ、既婚女性の地位は処女、寡婦に次ぐ最下位に位置付けられていた。他方、Ælfric のパトロンとして知られる Æthelweard や Æthelmær をはじめとする平信徒たちの多くは既婚者であり、彼らは結婚生活を通じて自らの信仰の指針とすべき聖人伝を求めていた。Ælfric の既婚の聖人を扱った作品群は、こうした求めに応じるべく書かれたものとされるが、彼の同時代の作家たちに同様のテーマを扱った作品が全く見られないことから、Ælfric の既婚の聖人に対する関心の強さをうかがうことができる。この Ælfric に固有なテーマとも考えられる既婚の聖人は、当時の社会通念の一端を伝える重要な鍵となり得るにもかかわらず、現在までにまとまった研究はまだ殆ど行われていない。

従来、Ælfric の散文作品については、標準古英語の発達や散文の連続性、説教散文の伝統と系譜研究等の側面から、言語的・文化的、また通時的・共時的に、国内外を問わず多くの研究がなされてきた。しかし、それらは「古・中英語期という男性中心のキリスト教社会で、人々は実際に女性をどのように認識していたのか」といった当時の社会通念を解明するための根源的な問いについて十分な解答を与えていない。このような問いに答えるためには、これまで個々に行われてきた言語研究や source studies の成果を女性研究と結びつけ、包括的な視野で問題を捉え直す姿勢が必要であり、そうした領域横断的な研究が求められている。

２．研究の目的

本研究は、研究代表者がこれまで集中的に進めてきた古・中英語期の韻文および散文における女性像の研究を継続発展させることを目的とし、最終的な目標である「古・中英語期における女性像の受容と変容の研究」の一部として行うものである。

10 世紀英国を代表する散文作家である Ælfric の女性を題材とする作品の中で、特にこれまで殆ど着目されてこなかった「既婚の聖人 virgin spouses」を扱った作品群を取り上げる。ラテン語原典等と厳密に比較対照を行い、語彙や作品構成の面から Ælfric の描く女性像の特徴を明らかにすると共に、当時の社会の女性認識について新たな視点を提示する。従来、語学的アプローチの対象としてのみ扱われてきた Ælfric 研究に新たな可能性を開きつつ、古英語期の英国における女性像の受容と変容の実態の一端を解明することを目指す。

３．研究の方法

（１）課題研究の基盤整備として、まず、Ælfric の virgin spouses 作品群について、既存の刊本を網羅的に収集・整理した上で、次年度以降の作業のベースとなるテクストの確定作業を行った。既存の刊本は、テクストが編者によって modernize されたり、写本が複数存在する場合には、編者がテクストの読みを優先して、必要に応じて写本を部分的にアレンジした critical edition であることも多い。ここでは、作者の意図を正確に読み取り、且つ、作品構成や使用語彙の異同を精査するという目的に適う新たなテクストを校訂した。作業にあたっては、原写本との厳密な照合作業を行い、句読点や写字生による修正などの情報も盛り込んだ写本に忠実な diplomatic edition を、検索可能な電子テクストとして編纂した。これによって、本テクストが英語史研究にも寄与することを目指した。

（２）次に、（１）で作成した Ælfric 作品の電子版テクストについて、ラテン語原典、Aldhelm、Bede および同一聖人を扱った作者不詳の聖人伝テクストの対応箇所を逐一対照して示す、パラレルテクスト・データベースを作成した。これら複数のテクストを並列して配置したことで、その異同を視覚的にも明確に示すことができると共に、Ælfric が原典に対して行ったテクストの削除や修正、並べ替え、加筆等の作品構成上のさまざまな改変、および Ælfric に特有の表現や語彙選択の傾向等の興味深い情報を明示することが可能になった。同時に、既婚の聖人伝に見る女性像が英国社会に受容され、徐々に変容していく過程を概観することも可能になった。

（３）最後に、（２）で完成したテクストを精査し、Ælfric が独自の女性像を構築するに

あたって行った、作品構成上の改変・語彙の選択傾向等について、ラテン語原典、Aldhelm、Bede および作者不詳の古英語聖人伝のテクストを精査しながら、様々なレベルで比較対照研究を行い、Ælfric の女性像の特徴を検証した。こうした作業を通じて、10 世紀後半から 12 世紀初頭のイギリスにおける女性像の受容と変容の実態の一端を解明すると共に、今後の研究についての展望を得た。

４．研究成果

（１）初年度である平成 27 年度は、課題研究の基盤整備として、まず、Ælfric の「既婚聖人伝 virgin spouses 作品群」（Julian and Basilissa 、 Cecilia and Varelian 、 Chrythansus and Daria）の既存の刊本の網羅的な収集と整理を行った。その上で、作者の意図を正確に読み取り、且つ、作品構成や使用語彙の異同を精査するという目的にかなう、新たな電子版テクスト(diplomatic e-text)を校訂した。

既存の刊本は、基本的に写本に忠実な転写を行っているが、部分的に独自の修正を施しており、その場合には脚注に写本との相違を具体的に記している場合(Skeat, 1881-1900)と、写本ごとに相違がある箇所や転写上に特記事項がある場合に、その旨を脚注に記している場合（Upchurch, 2007）がある。今回新たに校訂したテクストでは、J 写本（MS Cotton Julius E. Vii）に特化して原写本の閲覧を行い、Skeat 版と Upchurch 版の両者の修正箇所の再検証を行って、新たな修正点を付け加えた。

以上の研究成果については、論文「Ælfric の married saints 作品群をめぐって－Diplomatic Texts of Ælfric's Lives of Married Saints, Trial Version」、『昭和女子大学女性文化研究所紀要』、第 43 号（2015）1-25 に掲載した。

（２）平成 28 年度は、前年度に作成した Ælfric 作品の電子版テクストについて、ラテン語原典、Aldhelm、Bede および *the Old English Martyrology* のテクストの対応箇所を逐一対照して示す、パラレルテクスト・データベースを作成した。

また、このテクストの作成過程で、特に興味深い特徴を示すと思われた Chrysanthus and Daria について、Ælfric が行った特徴的な改変箇所を、4 つの項目（(1) 物語の簡略化、(2) 時間軸の意識、(3) 論理性（因果関係）の強調、(4) 女性の抽象化と結婚への言及）に基づいて分析した。その結果、Ælfric の Chrysanthus and Daria はラテン語の原典と比較して、1/3 程度の長さに簡略化されており、Chrysanthus の拷問の詳細や、Chrysanthus と Daria の宗教論争など、聴衆に劇的な印象を与える描写を大胆に削除し、事実のみを時間軸に沿って淡々と記述していることが明らかになった。また、Ælfric は、原典が、「神が彼らを通じて起こした不思議な出来事を物語るには時間がかかり過ぎる」と述べているのに対し、「ここで起こった奇跡を全て起こった順に書き記すには、長い時間がかかる（"Hit bið langsum to awritene þa wundra þe hi gefremodon ealle be endebyrdnesse"（219-220））」として、出来事を時系列に語ることへのこだわりを感じさせる表現を独自に書き加えており、このことは彼の語りの手法上の特徴のひとつと考えられる。Ælfric の女性描写については、女性の外見に関する描写を原典に比べて減少させ、形容詞のバリエーションを限定する傾向が見受けられる。また、物語に描かれる女性たちが、母や妻として行動する場面や聴衆の感情に訴えるような劇的な表現を削除することで、女性的な要素を取り除き、抽象的で様式化された独自の女性像を作り出してもいる。結婚についての言及も女性描写の場合と同様に、現実の夫婦生活を思わせるような記述は避け、事実を簡潔に述べて、聴衆に抽象的な印象を与えている。

以上の研究成果については、論文「Ælfric の既婚聖人伝に見る女性像 — Chrysanthus and Daria をめぐって」、『昭和女子大学女性文化研究所紀要』、第 44 号（2016）1-21 に掲載した。

（３）最終年度である平成 29 年度は、前年度に作成した、ラテン語原典、Aldhelm、Bede、*the Old English Martyrology* および Ælfric 作品のパラレルテクスト・データベースに基づき、特に chaste marriage（純潔の結婚）に焦点を当てて、当時の社会の様相と、それぞれの作者のテーマへのアプローチのあり方について考察した。

純潔を前提とする chaste marriage は、子孫の繁栄を説く聖書の教えに対して本質的な矛盾を孕んでいると同時に、当時の男性中心かつ独身至上主義が席巻する英国修道院社会にあって、男女、聖俗のボーダーに抵触するデリケートなトピックでもあった。正統派を自認し、聖職者たちのラテン語能力の低下と、その為に誤った英訳が量産され、異端の教義が世間に流布することを憂いていた Ælfric が、同時代の他の宗教作家たちが取り上げることのなかったこのトピックを、彼の代表作のひとつである『聖人伝』の中で敢えて取り上げたことにどのような意味があったのだろうか。同時に、大陸から伝播した原典を、英国人作者たちがどのように改変して受容していったのかを、7-11 世紀に著された作品を対象に、作者の背景と当時の社会的な文脈の中で捉え直して分析した。

7 世紀の Aldhelm と 10 世紀の Ælfric は、執筆された時代は離れていても、それぞれ、Barking Abbey の修道院長 Hildelith と自身のパトロンである Æthelweard とその息子 Æthelmær からの依頼を受けて書かれたという共通点を持つ。前者は修道院に集う修道

女たちのため、後者は英国有数の有力貴族でもある在家信者たちのために、信仰の指針を示すことが求められていた。聖人伝が元来、キリスト教の布教を目的に書かれていることを考慮すれば、正統派の立場を守りながらも、より多くの聴衆に受け入れられるように、扱うトピックや表現に配慮する必要があったことは想像に難くない。特に Ælfric は、バイキングの侵攻による当時の社会不安を背景に、原典を簡略化し、表現を様式化しながらも、女性を含めた立場の異なる多くの人々を作品の中に描き込んでいる。それに対して、8 世紀の Bede は、史実を重んじ、事実を確認できない伝承などは、作品から極力排除する傾向が見受けられ、歴史家としての厳格な姿勢をうかがうことができる。女性を取り上げる頻度も、他の作家たちに比べて圧倒的に低いことが明らかになった。

更に、Ælfric の古英語訳には、人間の五感のうち、特に視覚の表現について特徴的な傾向が見受けられることを指摘した。

以上の研究成果については、論文「古英語期における chaste marriage に見る女性像 -- Aldhelm, Bede, the Old English Martyrology and Ælfric」、『昭和女子大学女性文化研究所紀要』、第 45 号（2017）1-12 に掲載した。

古英語期の女性研究は、世界的に見ても、他の時代に比べて大きく立ち後れている。本課題研究は、そうした状況に対してひとつの具体的な成果を示したと考えられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 島崎里子、古英語期における chaste marriage に見る女性像 — Aldhelm, Bede, *the Old English Martyrology* and Ælfric、昭和女子大学女性文化研究所紀要、査読有り、第 45 号、2017、1-12.

② 島崎里子、Ælfric の既婚聖人伝に見る女性像 — Chrysanthus and Daria をめぐって、昭和女子大学女性文化研究所紀要、査読有り、第 44 号、2016、1-21.

③ 島崎里子、Ælfric の married saints 作品群をめぐって — Diplomatic Texts of Ælfric's *Lives of Married Saints*, Trial Version、昭和女子大学女性文化研究所紀要、査読有り、第 43 号、2015、1-25.

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

（１）研究代表者

島崎里子（SHIMAZAKI, Satoko）
昭和女子大学　文学研究科・准教授
研究者番号：90276618